▣蛟龍横る（六卷）

アシヤ現代映畫

第二百壹號

紹介

志波西果氏自身も暗に言譯じみた事を冒頭に記して居る通り譚りの筋こそ異なるが大綱のテーマは氏がマキノに在る頃書いた「鐵窓に見る月」と同樣である事は云ふまでもない映畫である。然し今は脚色者として又監督者として可成りの經驗を踏んで來た氏が新たに書直し自ら監督したものだけ氏の云はんとする受難者岩松の悲痛なる哀史は寧ろくどいほど好く表現されて居る。出獄して歸つた岩松の驚きは「鐵窓に見る月」では妻の死であつたのを今度は愛兒の死に改めたのも觀客の涙を誘ふのに効果がある。岩松が賊の金を手に入れる邊りから殉職美談の樣な場面までが最も好く、鮮かな場面轉換も一寸あつた。ラストのハッピーエンドは態とらしくていけない、やはり氏らしくアンハッピーエンドにした方が好かつたであらう。松本泰輔氏の岩松は演技は確かだが柄や容貌がお人善しの性格を充分出し得なかつた。澤蘭子孃のお政は孃のやる役ではないが相當演つてのけて居るのはあらい。發狂の邊りも縣命の演技を見せて居る。撮影其他は普通の出來である。

――山本　綠葉――

興行價値――題名が難かしい點は損であるが內容は悲劇としてかなり泣かせるから呼物にならずとも添物としては優れた映畫である。

（七月三十日　大阪芦邊劇場封切）